

2 女子グループ

「野球部に入んだけど、お前マネージャーじゃない？」

「…私、吹奏楽部に入る事に決めただ。」

ごめん、そう眩く彼女に俺は勝手に裏切られたように感じた。

※

あの日から3ヶ月たった。俺は野球部のレギュラーになれたのに、いまだに彼女の心は掴めていない。

放課後、ひさしぶりに廊下で彼女に呼びとめられた。

「〇〇君、来週の試合出るよね、応援行くから」

彼女はとても嬉しそうな声色で伝えてきた。俺のいないところで何か楽しいことがあったのだろうか。

俺は「おう、任せておけよ」と応え、練習に向かった。

※

九回裏の俺の打席。ここで俺がホームランを打てば逆転勝利の時。

吹奏楽部の演奏は場を大いに盛り上げ、球場のボルテージは最高潮に達している。

俺は打席に立ち、応援席に目を向けた。

彼女を見つけることはできなかったが、俺を応援してくれているはずだ。

一対一の勝負。ピッチャーが振りかぶった。風を切って飛んでくるボール。バットに感じる重みで勝利を確信した。

※

試合後、彼女を探していると、後ろから弾んだ声が聞こえた。嫌な予感を感じつつ振り返ると、楽器を持っている優しげな男と並んで歩いていった。

彼女は俺に見せたことのない表情で笑っていた。